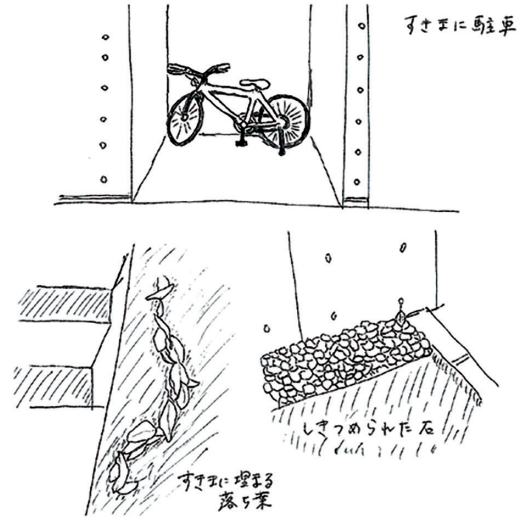
イータ村（ヴィレッジ）風俗採集

令和五年 四月

H村に見られる「縮み」思考

木根 景人



Hビレッジを歩いていると、新しくできたばかりか余白が多いと感じる。ゴミや汚れがほとんどなく、外のスペースも広々としており、人も閑散としていた。何か日本っぽくないなと感じる。逆に何が日本っぽく感じるのだろうか。韓国人の文芸評論家、李御寧は『「縮み」志向の日本人』という本で、古来より日本人の意識の底には「縮み」志向があると分析する。物を小さくする、縮める、詰める、込める、そういった変化や行為を日本人は得意としている。Hヴィレッジの広々と余裕があるところに違和感を持ったのは、その「縮み」志向が関係しているのかもしれない。そこで私は「すきまをしきつめているもの」に着目して歩いてみることにした。

まず見つけたのは、Basil棟の隙間（空間）にぽつんと駐輪してあった自転車である。横に駐輪場があるにもかかわらず、ひとつだけ隙間を埋めるように停めてあった。この何もない隙間を埋めたくなって自転車を停めたのか、それとも自分のだけ目立つところに置きたくて停めたのか。いずれにせよ、自転車がこの隙間を埋めるのに最適なサイズであったことは間違い無いだろう。

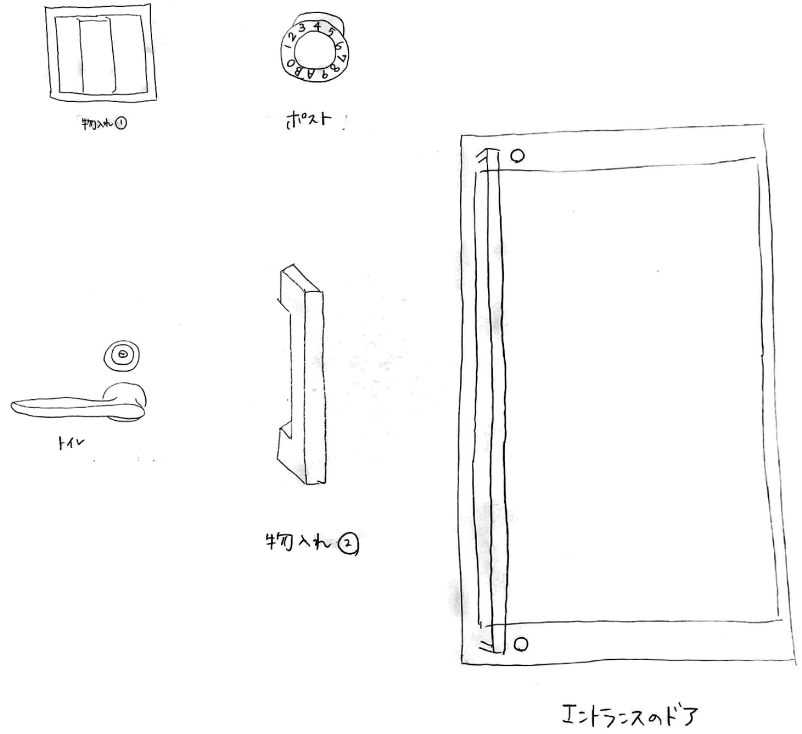
次に地面に着目してみた。壁際から土までのスペースを灰色の石（砂利）がしきつめていた。おそらくコンクリートの横から急に土や緑が始まっていると違和感があるため、その間に砂利をしきつめたのかもしれない。他にも、土の中の溝に落ち葉がしきつめられていた。雨で落ち葉が流れ着き、その溝に溜まったのだろう。地面には、小さいものがいくつも重なり合って隙間をしきつめていた。

食堂に行くと、コップやお皿が隙間を作らないようにしきつめられているのを確認することができた。冷水機の横にあるカゴの中いっぱいにコップをしきつめ、なるべく多くのコップをここに置きたいという思いが見られる。食堂にきた人はこのコップで、冷水機から出るお水もしくはお茶を飲み、洗い場近くのステーションにコップを置いていく。そのコップが洗われ、カゴの中になるべく一回でたくさん持っていけるように積み重ねられる。そして冷水機の横まで運ばれる。隙間を埋めて、時間と手間を省いていた。

参考：李御寧『「縮み」志向の日本人』講談社学術文庫（二〇〇七）

「あちら」と「こちら」のあいだ

河井 彩花



イータ村の住人は、一体どこで「行ってきます」や「ただいま」を言うのだろう。普段授業を受けているキャンパスの敷地から、ゆるやかな傾斜のついた道を歩いて食堂の自動ドアをくぐり抜けた時、ふと疑問に思った。

学びと暮らしが接近したこの建物は開放的で、自分の手でドアを開けなくてもスムーズに空間と空間を行ったり来たりすることができた。外から建物を見ると、ガラスの内側で住人がソファに寝そべってくつろいでいるのが見えた。あの人にとって、きっとここはもう家なのだろう。では、私が立っているこの中庭は、キャンパスなのか住宅なのか。住人以外がいていい場所なのか違うのか。イータ村を歩きながら、なんだかよくわからなくなった。でも、よくよく観察してみると、「あちら」と「こちら」を隔てるものの存在に気づいた。

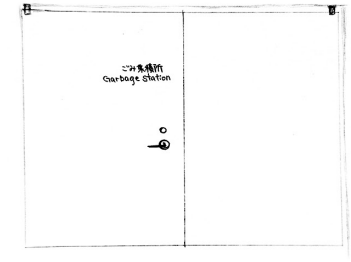
イータ村の共同棟、ソルト・ハウスの正面右側には、住民用の郵便ポストが並んでいた。アパートやマンションでよく見るように、同じ形のポストが縦と横に連なっていて、その一つ一つに〇から九までの番号が振られていた。まだ新品同様のポストは真っ白なままで、私がここの住民だったら自分のポストの位置を覚えるのにしばらく時間がかかりそうだなと思った。見た目がそっくりなポストは、それぞれ決まった番号にダイヤルを揃えて中身が取り出されていく。このダイヤルが「あちら」と「こちら」を隔てている。

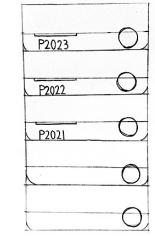
エントランスのドアには、ドアの縦幅と同じくらいの長さの取っ手がついていた。ステンレス製の取っ手を握ってみると確かに手に馴染むけれど、ひんやりとしていてどこか澄ましているようにも思えた。食堂やラウンジを使う学生のために解放されているこのドアも、よく見ると上下に鍵がついている。夜には、住民たちが安心して眠りにつけるよう、施錠されるのだろう。

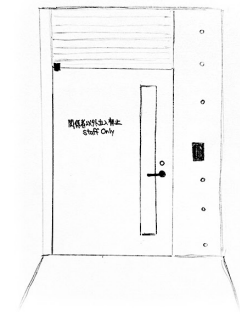
他にも、トイレや物置、会議室の入り口には、ピカピカの取っ手がついていた。公空間から共空間へ、共空間から私空間へ移動する時、その間には取っ手がある。「あちら」と「こちら」を隔てるそれは、この村に住む人たちに居場所を与えている。そして、きっとここの住民は、生活の繰り返しの中で自分なりの境界を見つけて、そこを越える時に「ただいま」と「おかえり」を言うのだろう。

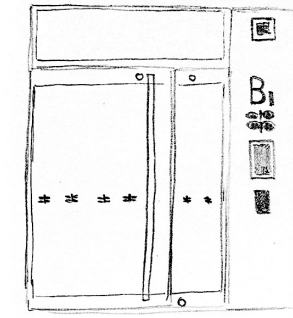
くぐって接する

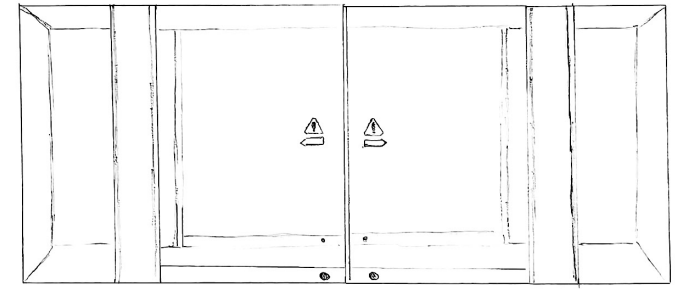
篠原 彩乃











イータ村の住人は、そこに存在するいくつものドアに対して、その存在を特別に意識して暮らしてはいないだろうと思う。そう思ったのは、イータ村での風俗採集を終えて、撮ったドアの写真を見返しているときだった。私の関心がドアに向かったのは、私がイータ村の住人ではないために、アクセスできる場所とできない場所の境界線に対して敏感になっていたからではないかと思う。

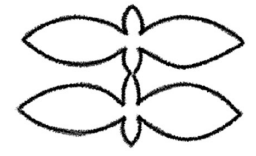
アクセスしてもよいのかどうかを探りながら歩くなかで、視界にドアらしきものが目に入ると、その先に広がっているであろう空間、いまここの空間とはなにかちがう意味や機能をもった空間を自然と想像していた。そしてその空間を確かめようと実際に開けようと試みたり、ドアの表示をみて判断したりする。たとえば、「関係者以外立入禁止」や「ごみ集積所」などが記してあるドアがあった。また、ドアの脇に取り付けられているインターホンや黒い機械の存在は、限られたひとだけに入室がゆるされていることを私たちに伝えている。ほかにも、見かけたたくさんの郵便ボックスは、スケールのちがうドアと空間として見ることができる。

イータ村で最初にくぐったのは正面に構えている自動ドアだった。一枚くぐるとその先にもう一枚、そして左右にも自動ドアが待ち構えている。左は食堂で、昼食の時間帯はイータ村の住人以外もそこで食事をすることができる。私は何度かそこでお昼ごはんを食べたことがあるが、そこの自動ドアから、食堂を出ようとする人と入ろうとする人が、すれちがう瞬間にお互いが知り合いだと気づき少々足を止めて言葉を交わす場面に居合わせたことがある。それを見たときに、ドアはこういう瞬間をつくるのにじつは一役かっているのではないかと思った。もちろんドアがなくとも、誰かとすれちがう瞬間は無数に存在するけれども、ドアの存在によって相手の存在がより強調され、自分もまた相手に認識されていると感じるような気がする。自動ドアが開くまでの微妙、絶妙ともいうべき時間と、せっかちな私たちの足取りが、自動ドアが開ききるより先にどちらかが通れるようにと譲りあうための意思の疎通やアイコンタクト、会釈を行なう場面を作りだす。それを煩わしいと感じるときもあるし、その些細なやりとりから素朴なうれしさを感じるときもある。イータ村で暮らす人びとの生活のなかにもきっとそんな瞬間があるのだろうと想像して、すこしたのしい気持ちになった。

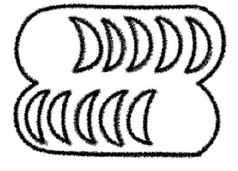
ロゴマークとつながり

大森 彩加

ローズマリー

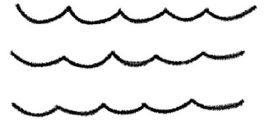


バジル



ターメリック

パプリカ



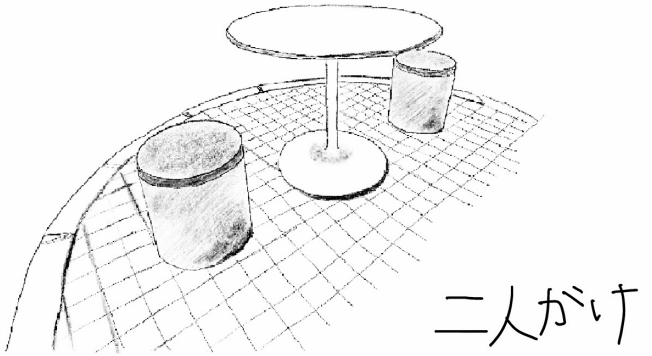
焼きながらのペアと会話を交えながら行われたイータ村風俗採集だが、足が止まることなくずっと歩き続けていたためかなり隅々まで周れた。私が敷地内に入り、最初に目に留まったのは所々に生えている植物だった。建物が打ちっぱなしのコンクリートである一方で、さまざまな植物や木材を使ったテラスの床や木目調の家具が外から見えたため、あたたかみを感じた。Hヴィレッジに入るとすぐに開けた広場のような場所があり、両端には小さな中庭があった。そこには砂利が敷き詰められており、数本の細長い木と茶色と黄緑の茂みも生えていた。SFC周辺が元々自然豊かであるためなのか敷地内にたくさん植物があるわけでもないが、大自然に囲まれている気分になった。しかし、植物は「人工物」というお題の対象外だったため満足するまで見つめた後、違うものを探すことにした。

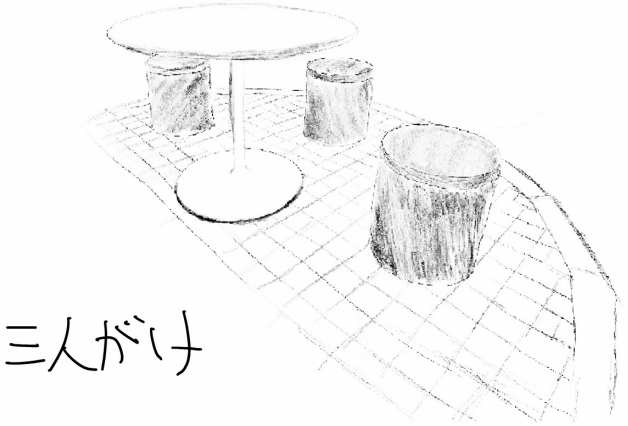
次に私は各棟にあるロゴマークに目をつけた。それらのマークは入り口のドアや窓、ロッカーなど一箇所に留まらず複数箇所に貼られていた。一番最初に見つけたのは細長い半円が三つ繋がっているもの、次に円が重なったようなもの、その次に植物のようなもの、最後に矢印が繋がったようなものを見つけた。初めは窓についているマークを見つけたため棟名は書いておらず、何を象徴しているのかがわからなかったが、入り口やロッカーにアルファベットで各棟の名前が書かれていたためそれぞれパプリカ、ターメリック、バジル、ローズマリーだと分かった。各棟の名前の由来はフィールドから帰宅した後に知ったのだが、「人生にスパイスを」という理由に加え、「人生に癒しを」という意味や、頭文字の調整など、様々な意見が合わさった結果スパイスやハーブなどの名前になったと知った。

今回の風俗採集を踏まえて、ロゴマークは組織やイベント事の象徴とされるイメージがあったが、反対にロゴマークが人と人とを繋ぐ場合もあるのではないかと考えた。もちろん今回のような場合、棟の名前とロゴマークは郵便物を届けやすくするためのものでもあるだろうが、もし仮に私が寮に住んでいたならば、それらがあることによってより自分の棟への愛着や帰属意識が強くなるような気がする。もしかすると、「私はターメリック棟の住人だから今まで買ったことがなかったが、カレーにターメリック入れてみよう」と考えるかもしれない。

対話のかたち

磯野 恵美





ＨＶＩＬＬと書かれた横断歩道を渡り、出迎えてくれるソルトのエントランスをくぐり、生活感のない、新築の香りを吸い込んだ。この香りは、これからどのように変化していくのだろうか。住民ではないけれど、期待を膨らませて、もう一度、新築の香りを肺いっぱいに吸い込んだ。エントランスから、影になっている無機質で肌寒い通りを抜けると、ローズマリーとパプリカに挟まれた中庭がある。中庭には、椅子とテーブルが置かれていた。椅子に腰掛けて、あたりを見回す。同じ椅子とテーブルのセットが向かいにも用意されていた。

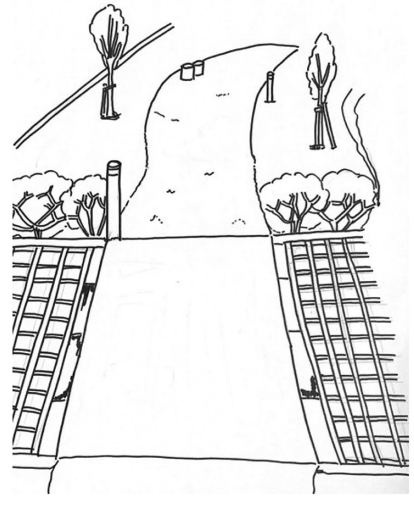
テーブルは可動式だが、椅子は石でできていて、固定されていることに気づいた。なぜ椅子を固定させたのか気になった。椅子は、地面にしっかりと固定してある石の椅子だ。場所によって、二席と三席のパターンがあった。この石の椅子は、もしかしたら、ここで生まれる対話をデザインしているのではないかと想像し、イータ村の住民のことを思いながら、寮生活で生まれるだろう、対話のかたちに思いを巡らせた。ふと、ソローが書いた「ウォールデン 森の生活」の椅子の話を思い出した。

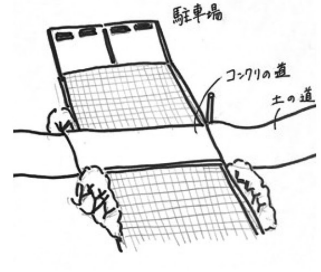
ひとつ目の椅子は独り居のため、二つ目はよき友のため、三つ目はみんなのため。寮生活において、それぞれの椅子が生む対話について考えた。ひとつ目の椅子は寮の個室だろう。研究に没頭し、自己と向き合う。よいことも、わるいこともまるっと受け止める時間だ。集団生活の中にいても、独りの時間は大切ではないか。二つ目の椅子は、対面する会話だ。互いの表情が見える距離で、情報をやり取りする。対面するのは、友人だけではなく、先生との対話も含まれるだろう。三つ目の椅子は、より複雑な対話になる。相手の空気を読み、即興的に会話を転がしていく。ときには、会話に入れなくて、何とも言えない気持ちになることもあるだろう。

動かない椅子は、この場所の対話を約束している。集団生活の中にも、小さな単位の会話を大切にするきっかけになるのかもしれない。帰り道、また入り口のエントランスで新築の香りを嗅ぎ、イータ村の住民たちは、それぞれの持つスパイスをどのように調合して新しい文化を作っていくのか楽しみに思い、イータ村をあとにした。

続く意志をもった道

坂根 瑛梨子





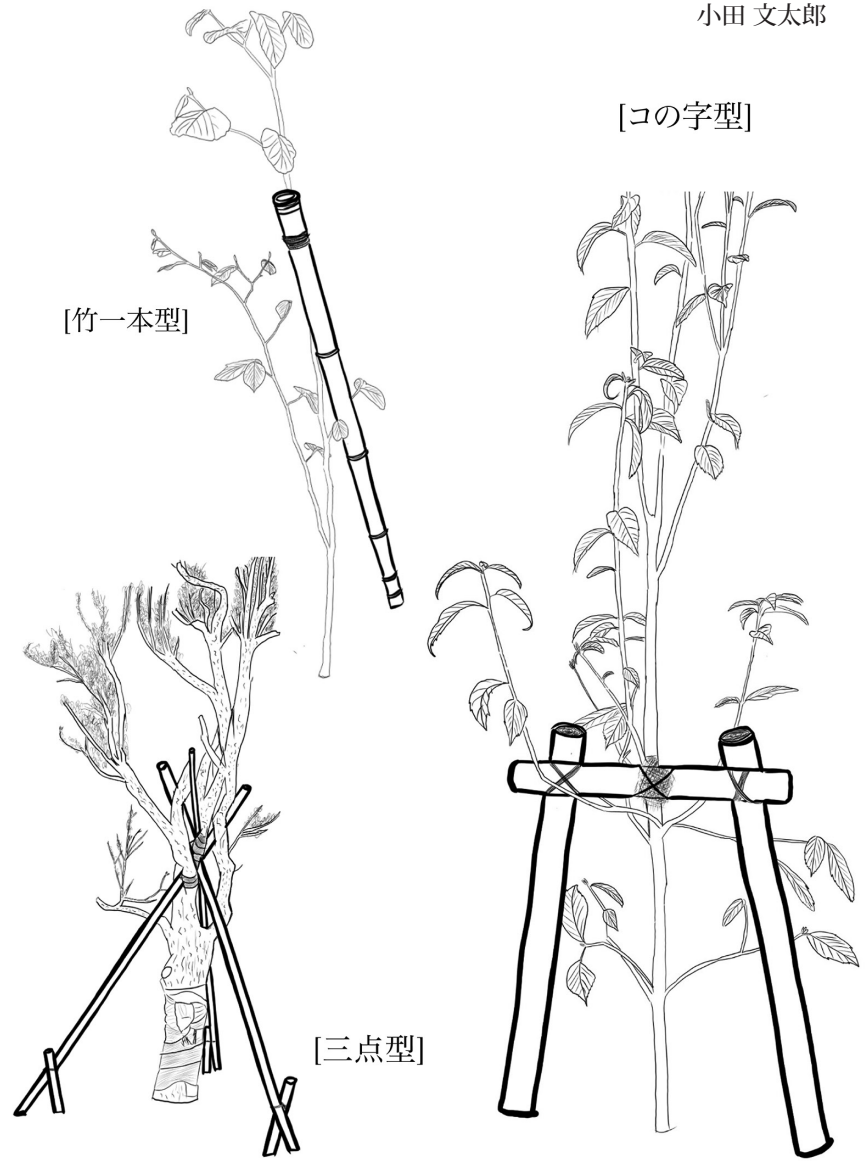
イータ村の建物の裏側に回ってみると、緑のなかに一本の土の道が敷かれている。ゆるやかにうねっていて、途中に切り株の形をした椅子が置かれていた。土を踏みしめながら歩く感覚が好きだなと思いながら進んでいくと、道の材質が一瞬、変わった。色は似ているが、直線で、コンクリートでできている。見ると、土の道と交差するように、駐車場に続くコンクリート調の道が通っていた。サイドには、芝生と石畳が合体したような、もう一つの道が敷かれている。私は正直、少し残念に思った。土を踏みしめる感覚が、そこで一旦中断されてしまうからだ。しかも、さっきまであったゆるやかなうねりも、ここでは直線で、あまりに綺麗にまっすぐすぎている。そう思いながら隣のベータ村に足を伸ばしてみたとき、もう一つの道に出会った。ベータドームのほうへ行く坂道で、明らかな草むらのなかに、ロープで作られた細い道、一見道とは呼べないような道、があったのだ。しかしロープが確かに「ここは道だ」と主張していて、その道を作ったであろう人の意志が確かに感じられた。道は、誰かが「みんなにここを通ってほしい」という思いから成立するものなのだと気づいた。

ベータ村から帰ってきて、改めてさきほどの道を見たとき、印象が変わった。この道が「続こうとしている」意志をもっているように見えた。ゆるやかにうねるこの土色の道は、べつに一旦中断されてもいいはずだ。駐車場へと続く石畳の道が横切っていても、通行にはなんの問題もない。しかし、わざわざコンクリの色を土の色に擬態させてまで、この道は続こうとしている。ずっと見ていると、土の色に似せているけれども、それでも色が違って見えるコンクリの色が、真似しきれていない半人前のようで、可愛く思えてきた。歴史的観光地にあるコンビニのように、景観に溶け込もうとしている人工物をたまに見る。しかし人工物が人工物に溶け込もうとする光景は、めずらしいと思った。

イータ村の住人たちは、コンクリになってもなお続く意志をもったこの道を歩くとき、「ここを歩いているじぶんが主役だ」と感じることができるだろう。また、この道を横切るようにして設置されている駐車場を使うひとは、「ちょっとお邪魔します」という気持ちで車を停めるのだろう。通るひとたちの意識や、この道を作ったひとの「土の道が続いていると思って歩いてほしい」という願いを想像すると、イータ村の裏を歩くのが少し楽しくなるだろう。

支えるもの

小田 文太郎



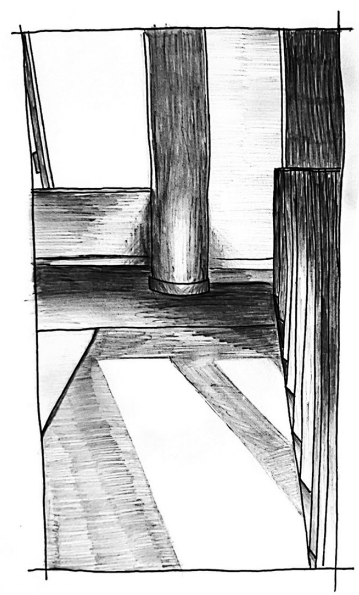
私は最初イータビレッジに対して、ディストピア感が強いＳＦ映画に迷い込んだという感想を抱いた。ソルト棟の自動ドアから入り、中庭を抜けてぐるっとイータビレッジ全体を一周した。イータビレッジを隅々まで歩いてその中でも私は支柱に注目した。

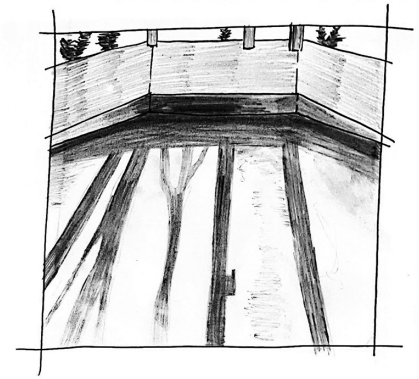
イータビレッジの中庭と外回りには木がたくさん生えている。その木々は人為的に植えられたものだ。幹は細く葉も少なく支柱に支えられている。そのため、木々は弱々しく木なのに人工的だった。そして、ほとんどの木に支柱が添えられていた。支柱は木の背丈と幹の太さの違いに対応して三種類あった。一つ目は竹一本型の支柱だ。高さは二メートルほどで、幹は片手で握り込めるくらいの枝のような細い木に添えられていた。この支柱は、木と地面を直角三角形の辺とすると斜辺のように一本の竹で構成されているのが特徴だった。二つ目はコの字型の支柱だ。これは高さが三～五メートルほどで、竹型よりも高い木に添えられていた。支柱の素材は木で、三本の木を金属のワイヤーで結んで成り立っていた。また、木の幹が片手で握り込めないほど太く約五メートル以上の木には、コの字にもう一本木が添えられている応用的な支柱もあった。コの字型は一番多い型だった。三つ目は三点型の支柱だ。これは特殊でイータビレッジの外れのおそらく死んでいる木にのみ支えられていた。その木はさきほどあげた木よりも幹は太く背丈もかなり高かった。葉が全て枯葉だったので死んでいると思った。その木が植えられてから死んだのか、死んでいたが倒木を防ぐために支柱で支えているかが気になった。

私はＳＦＣに初めて訪れた時、他の大学よりも森に囲まれているのが魅力的だと感じた。イータビレッジに欠けているものは森だと私は思う。森林浴という言葉があるように、私たちは森に精神的な安らぎを感じている。森は人間生活の一部で人を支えているものだ。だから、イータビレッジにも多くの木が植えられたのだと思う。ＳＦＣのイータビレッジへ向かう途中の坂道には役目を終えた支柱の残骸と立派な木が数本あった。支柱の割れ具合や木の太さと支柱の不釣り合いさから相当な年月を経ているのが窺える。イータビレッジの木々はまだ成長過程で幼い。支柱が外れて根を張り森林を形成するころには私たちの生活を支える大きな存在になっているだろう。支柱は木を支えているし、私たちの生活さえも間接的に支えている気がした。

差し込む陽とできた影

菱谷 光





新築のイータへ行く。そこにあったのは、打ちっぱなしのコンクリート、真新しく整いすぎている芝生、まぶしいぐらいの白。やはり新築は無機質的な人を寄せ付けない何かがある。いつも皆が集合するドコモハウスは、木のぬくもりがあり、その建物の周りを無造作に木の葉が散らばっている。そんな自然そのもののような建物であるドコモハウスとサイボーグのようなイータ館は、正反対なイメージを受ける。

こんな無機質なイータ館で今回私がテーマにしたものは、「建物に差し込む日光と生み出される影」だ。

この採集を機に初めてイータを訪れたが、私が最初に魅力的だと感じたものは、規則的に並べられたベンチや近未来的な形をしたイス、眩しいぐらいの緑を放つ若々しい芝生でもなく、コンクリートに反射された日光だった。私が見たものは、何物も寄せ付けない不健康な灰色に暖かい陽の光があたり、じわっとその部分が白やオレンジに近い色を持っていた。そこを眺めていると、灰色が火照ったように輝き始め、少し健康的な色になる。今回はその瞬間がいろいろなところで発生していたため、ひたすら採集した。スケッチには、その光が様々な場所に入り込み、沢山の灰色を火照らせ、輝く様子を描いた。

スケッチで意識したことは、影だ。建物の中に光が入ってくる部分は、まっ白ではなく、建物特有の灰色や黒が織り混ざり、まっ白とは言えない複雑な色をしている。また、影も黒一色では表しきれない。影は影でもその中に、円柱にあたることでできた影が重なり黒の中に黒を重ね、含まれている。

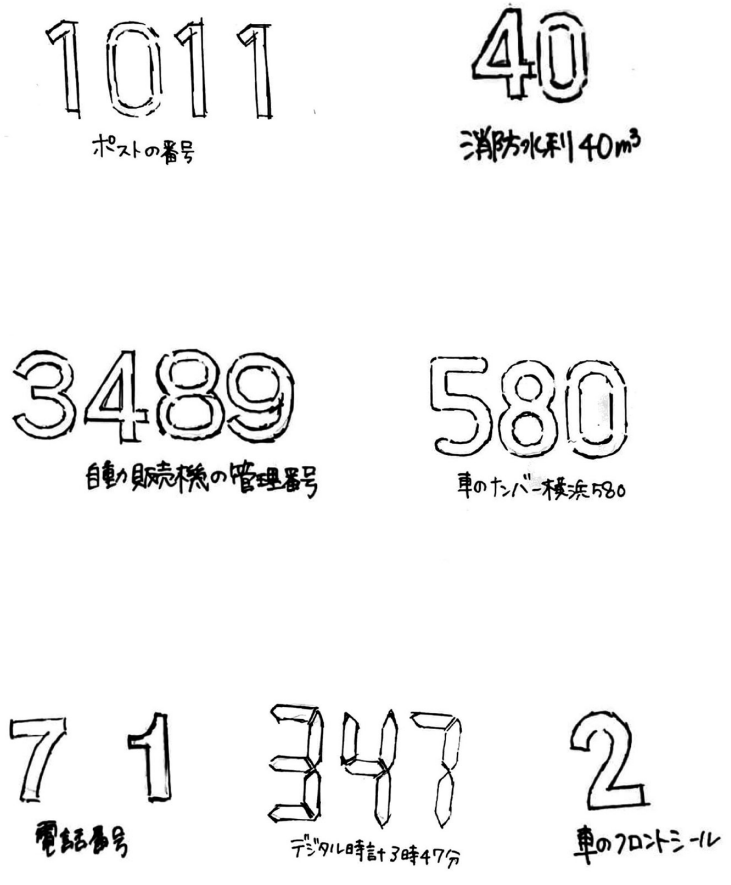
これらの発見は、日差しを浴びたいからといって日向に出ても見つからない。これは、差し込む日の光と建物が織りなすコントラストによって生まれることで、複雑な光と影を目視できる。

この無機質なイータ館に、日光が差し込むことによって暖かみをもち、人が集まる場となる。日光と影のコントラストが今目の前にある情景により立体感を持たせ、生活している実感を得られる。

お日様とそこから生まれた影に注目して、より現実味を帯びた生活を過ごしていきたい。

｜○から九は何種類？｜

岩﨑 日向子



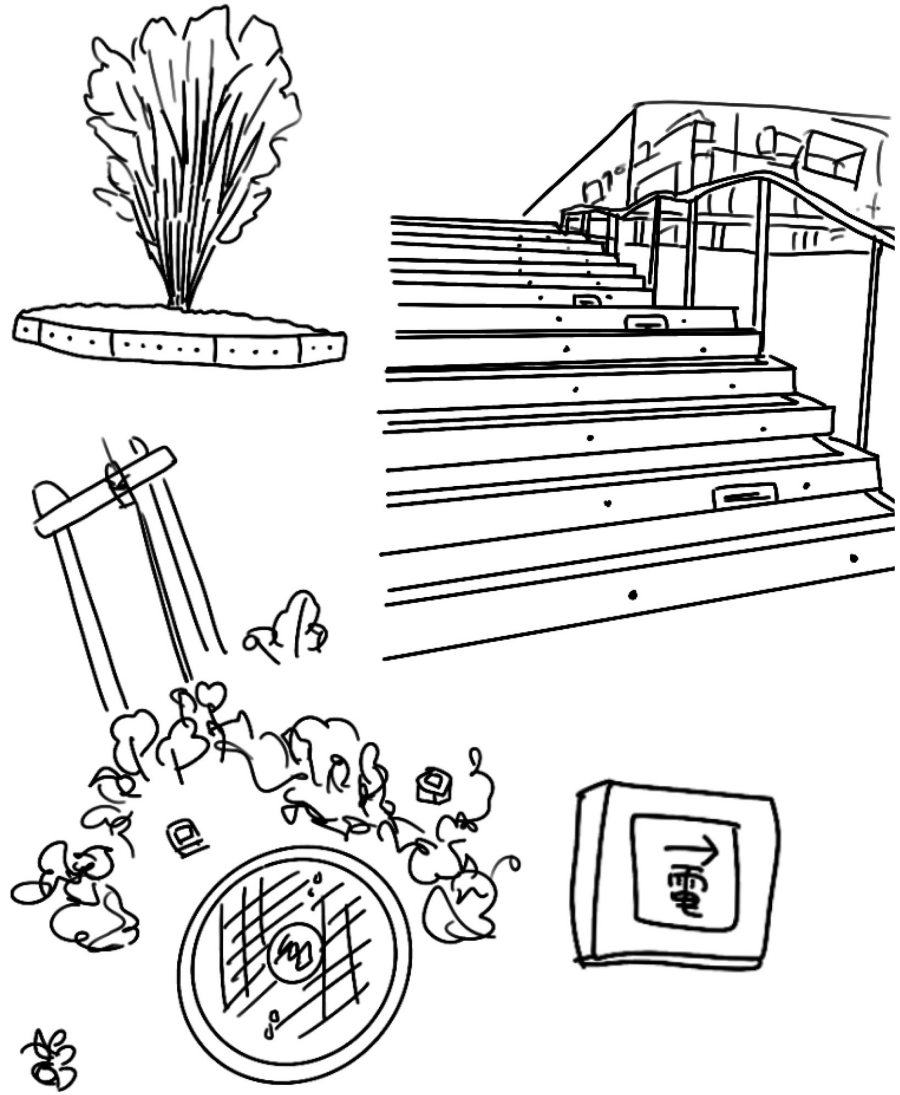
「採集するものが他の人と被らないように努力しちゃうよね。」と話しながらイータ村をぐるぐると歩き回った。同じ場所を何度も歩いた。歩きながらイータ村の周りには緑色の草木が生えていることがわかった。イータ村にはダンゴムシがいることがわかった。話も尽きて採集するものを探していたが、わたしの目にはそのような自然の景色ばかりが入ってきた。たくさんの種類の草木や虫だけではなく、できたばかりのイータ村の他の景色と魅力を感じたかったわたしは、もっと人の手が入り込んだイータ村の室内に入ってみることにした。

最初に入ったところにたくさんのポストが並んでいて眺めながら歩いていると一から九までの数字が羅列してそこに住む人々の区切りをそれで表していることが面白くなった。そこから数字を集めてみようと考えた。ポストを出て、大きなデジタル時計が目に入りそれを写真に収めるとそこにいた管理人さんに不思議そうな顔をされた。しかし次には大きな声で挨拶をされたのでイータ村の住人が一気に羨ましくなった。次に喉が渇いたと二階の自動販売機に向かった時一六〇円の表示と大容量六〇〇 ml をみつけた。しかし写真に収まったのは一六円と六〇〇 ml だけだった。テレビを写真に収めるとき画面がウネウネしてみえる、あの様子が自動販売機でも起こって一六〇円の〇が消えてしまった。ちょっと面白くて何度かチャレンジしてみたがどうしても一と六と〇は全て同時には写らなかった。

自動販売機やエレベーターなどのデジタルで表示される数字はイメージ通り、セグフォントと呼ばれるもので、日付を周知している張り紙や食券を買うための販売機などの表示はゴシックで書かれることが多かった。なんとなく私たちは場面やそのもののイメージによって、それらしいフォントを使い分けていて、それぞれ納得がいっているように使っている。だからわたしも、あそこに行ったら違う種類の数字をみつけることができそうだと思いながら歩き回った。使われる数字のフォントが違えば、そこでの数字の立ち位置も微妙に異なるからたくさんの種類の数字が使われているイータ村は魅力的だった。どこでも座れる多くの場所で、授業を受ける人もいれば大人数で談笑する人、一人で黙々と作業をする人、そしてそこに紛れるイータ村の住人ではないわたしたち。しかしそんなわたしたちでもすんなりと溶け込める空間がイータ村にはあった。村と呼ぶにはぴったりの場所だった。

｜もうひとつの現実｜

黄 才殷



建てられたばかりの建物に入ることは、楽しいことでありながら、少し恐ろしいことである。少しも汚れていない、ピカピカの「Hヴィレッジ（学生寮）」をはじめて目にした時、ここに人が住んでいるとは到底思えなかった。毎日のように通っているキャンパスのすぐ隣にあるイータ村だが、なんだか外国のように感じられた。ふだんのキャンパスとは全く違う、もうひとつの未知の世界。「焼きながら」を口実に、歩いてアクセスできる異国に思い切り飛び込んでみた。

まっすぐで広い道を歩くと、ふだんのキャンパスでは見られない景色が広がった。牧歌的な情景を眺めながら、心の中で愛着という感情が芽生えてきた。たくさん歩いてみたい、という考えからイータ村のあちこちを旅することにした。ここに住んでいる住民たちやマンホール、花壇など、このむらを作っている物事に着目して足を運んだ。

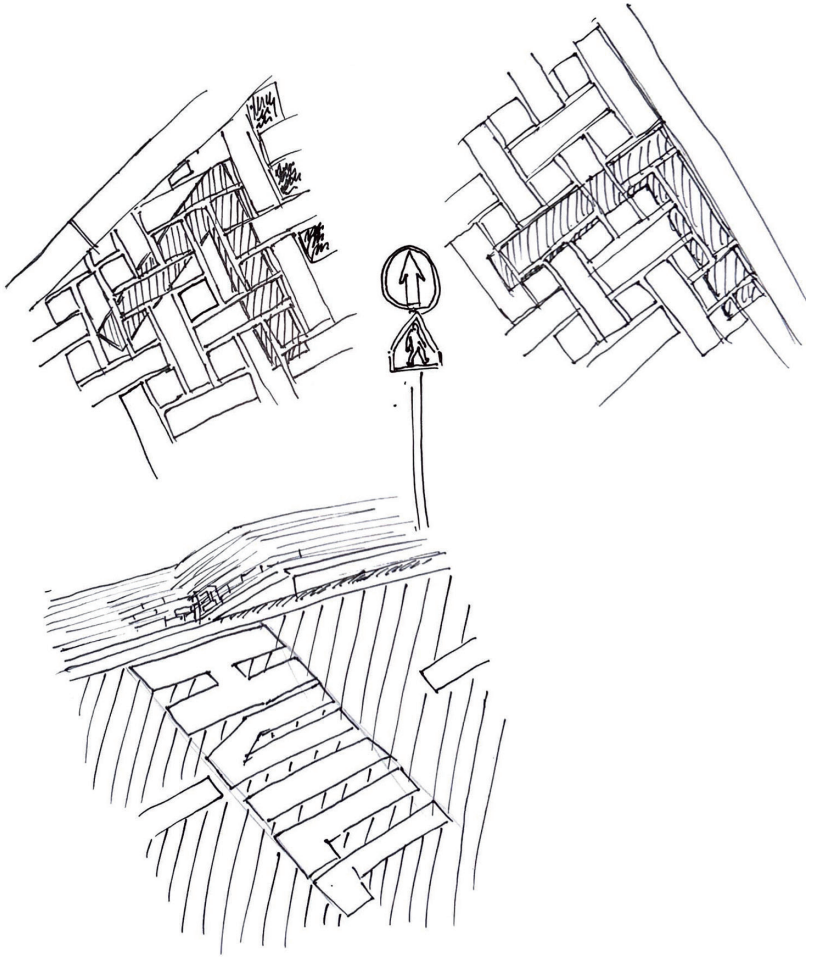
そう意識して歩いてみると、おもしろいことが見つかった。イータ村の花壇には「電」と書いてある不思議な物体が埋めてある。そして、その文字の横には矢印も画いてある。花壇とこの不思議なものにはどういう関連があるだろうか。他の花壇も覗いてみて、これは土の下に埋もれている電線を表しているものではないかと推測できた。目の前に電線はないが、電の文字と矢印の方向を脳内でなぞってみることで、土の中の仕組みが見えてきた。実際には見えないが、認識し始めると見えてくる「もうひとつの現実」を作り出すことができたのだ。

そうすると、今回はイータ村には不思議なほど「点」が多く存在することに気づく。学生寮の界隈にはたくさんの点があって、イータ村の階段にもそれが一直線で並んでいる。それに沿ってイータ村を歩いてみると、ある程度の動線が自然にできあがる。イータ村に点在しているそれは、あたかも「ここにお進みください」というシグナルを送っていたのだ。

この経験から、この場にいない人のことも描けるようになった。この村を設計した人の考え、そしてその裏にある思いやり。利用者だけではなく電線を探す人が苦労しないように、実在している現実の上にもうひとつの現実をデザインしておく。道を迷わないように表示板のような役割を果たす多くの点を作っておく。まるで「航空路」のようだ。安全に旅立つことができるように見えない道を作っておく。よそよそしかったイータ村が、とても暖かい村に一変する瞬間だった。

下書きと上書き

青山 洸



イータ村に入るとき、上書きされていると思った。例えば、ＨＶＩＬＬという道路のペイントは、もともとまっさらだった道路に上書きをして、ここがイータ村の入り口だと知らせる役割を担っている。そして、マス目の地面の上に白い矢印のようなペイントで上書きすることによって、車の停車位置を表している。こうして、至る所に下書きに上書きの関係性が見受けられるのだ。

上書きをするのは比較的やりやすいと思う。あらかじめ下書きが用意されていて、そこから着想を得ることができるからだ。下書きあっての上書きだ。しかし、下書きを書いた時は、最初の構想の時点ですごく悩んだはずだ。一つ一つの要素を考えるだけでも多くの悩みや苦難があったと思う。何事において、下書きを創るのは容易ではないはずで、上書きと下書きをするのは全然違う行為になる。

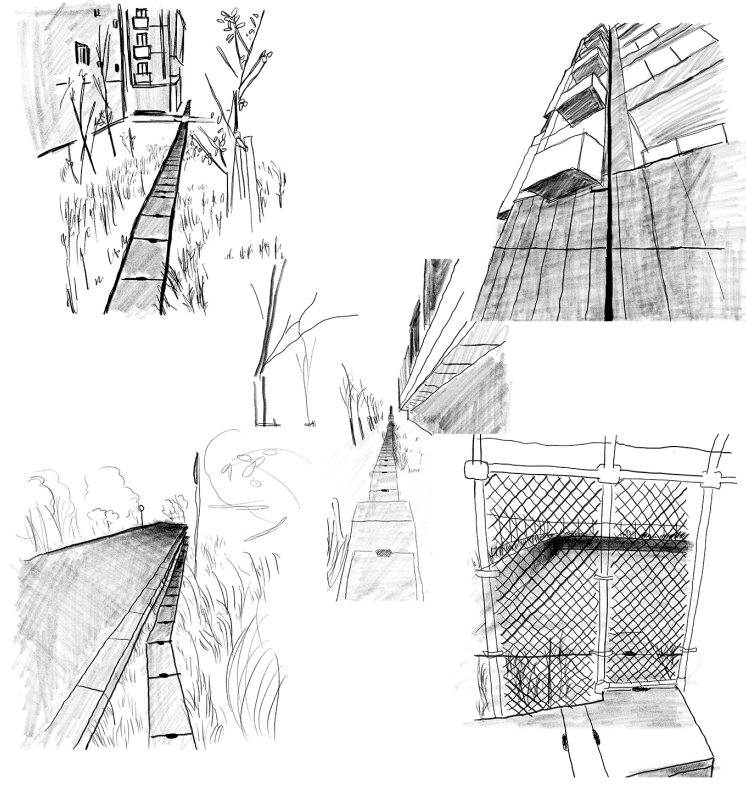
下書きがしっかりしていると、上書きもどんどん良いものになると思う。例えば、イラストで例えると下書きがしっかりしていないと、上書きも幅を広げることができない。今回のスケッチもぶっつけ本番で書いたが、下書きがある方が高いクオリティで、伝えたいことも明確にすることができる。上書きは下書きに依存している関係とも言える。

また、私たちの生活でも下書き上書きの関係が発生している。分かりやすい例えでいうと「言葉」だ。言葉を上書きすることは決してできない。一度その人の口から音として発せられた言葉は記憶喪失にでもならない限り、一回消して下書きを綴りなおすことは不可能だ。このように、私たちの生活の中には保存もできないし、上書きもできないものがたくさんある。それはきっと目に見えないもので、取り消して保存することは決してできない。

イータ村はきっとこれからも住む人たちの記憶、言葉、生活がどんどん上書きされるような場所になっていくんだろう。イータ村の下書きを保存してきた人々の想いを胸に、決してその下書きをデリートしてしまうことなく、どんどん上書きがされていって、ＳＦＣ生の良いドミトリーライフを過ごせるような居っっっっっｓ場所になることを願う。

Hビレッジを流れる川

渡邉 鋼太郎



人が生活する場所には、必ず水が流れる。学生寮であるHビレッジにも、もちろんたくさんの水が流れていた。SFCの北側に位置するHビレッジは、キャンパスからの斜面に沿って建設されている。

標高が最も高い、キャンパス側の部分にはエントランスと食堂があり、そのまま奥へ進んでいくと居住スペースが現れる。

キャンパス側から進むとHビレッジ内の標高は均一なように思えたが、居住スペース中央にある広場からキャンパスの反対側（慶育病院側）を見ると、実際は居住スペースが小高い丘の上にあることがわかった。

正面入り口からHビレッジを探索したあと再びキャンパスに戻って、今度はβドームがある側面からHを探索することにした。

緩やかな傾斜の砂利道が続くη側面は、慶育病院のある通りまで道が続いている。

砂利道に沿いには並木があり、さらにその脇にはコンクリート蓋付きの用水路が両脇に配置されていたので、用水路の上を歩いて斜面を下ることにした。

用水路の上には進路を遮るものが何もなく、斜面の一番下まで一直線に進めた。

途中で居住スペースの土台部分と裏口の前を通過して、最後は広い真四角の貯水プールにたどり着いた。

道すがら、建物と水路の接合部分で何枚か写真を撮った。斜面から見るとものすごく高く見える居住棟からは長いパイプが一直線に降りていて、水路に合流している。同様の仕組みでHビレッジの至る所から水が集められて、いくつかの箇所で水路に合流し、斜面の傾斜を利用して最終的に貯水プールまで流れていくのだろう。

斜面に沿った水路はHビレッジの反対側面にも設けられていて、村全体を水が囲んで流れるようになっていた。

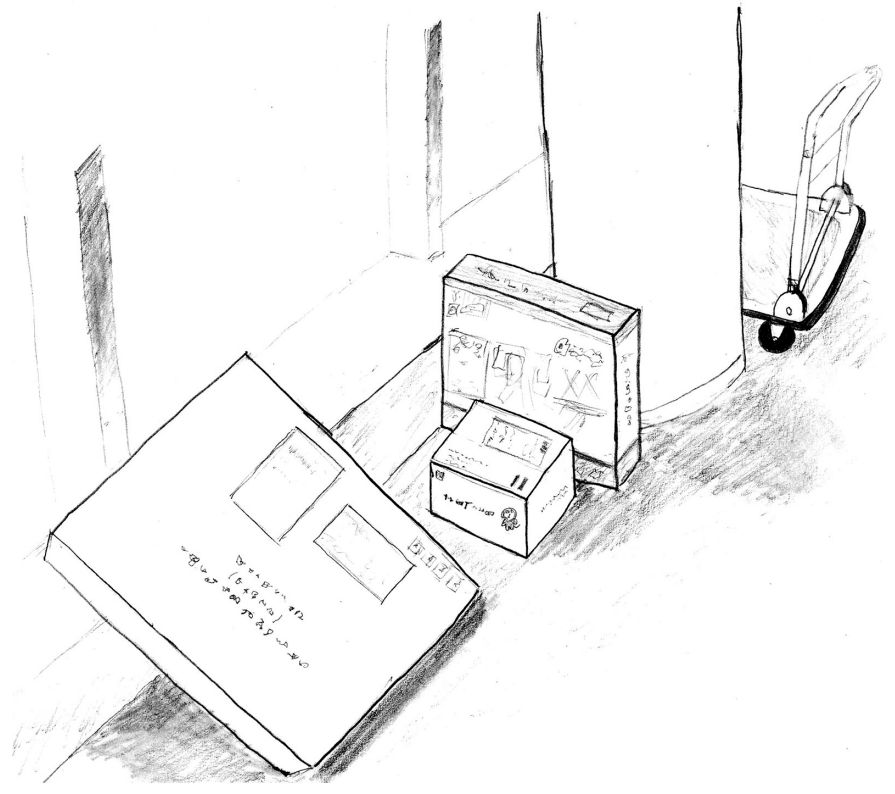
傾斜を使った排水システムは無駄がなく、さりげなく脇に設置することで景観も損ねないため、Hの用水は非常にスマートだなと感じた。

これから梅雨の時期が来てたくさんの雨が降るようになれば、排水システムの性能が生活者の暮らしを維持できるか試されることになる。

居住区からやや遠く設置された貯水プールは排水の大音を生活者から遠ざけ、Hに流れるスマートな川が村内の移動を快適に保ってくれるだろうか。

平和のおかげでアナーキー！

小泉 大



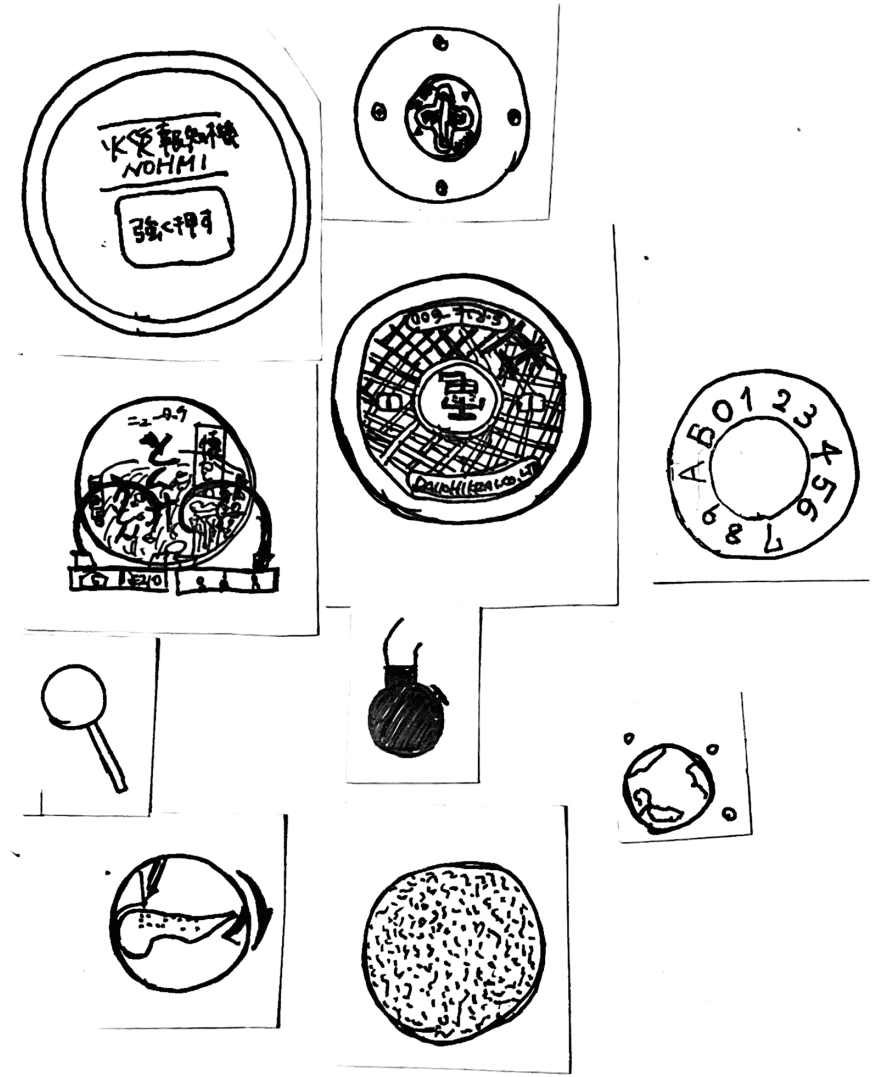
初めて散策したH村は、ひたすら閑散として平和だった。実際、ほとんどの住人が家を空けている時間だったことは確かだ。けどむしろ、そんな無防備な時間に自由な散策を許してくれるHの様子は、信用というより、猜疑心を知らない無垢な性格を表していた。せっかくの機会だし、Hの寛容さに甘えないなんて勿体無い。僕はHを隅々まで調べることにした。

Hには、その平和を象徴するような風俗がいくつも見受けられた。まずソルト棟は、全体的にほとんどの部屋やベランダが施錠されておらず、オールウェイズ侵入日和といったカンジ。また、棟を出て村の北側に歩くと、建物のスキマを埋めるかのように一台の自転車が停められていた。横にはガラ空きの駐輪場があった。特に象徴的だったのは、ソルト棟一階東側にある宅配BOXスペース。なんとそこには、台車で運ばれてきたままの宅配物がポストへ収められることもなく床に放置されていたのだ。なんたるアナーキー。ポストまで数メートルのところまで運ばれ、あと少しの目的地に向かうこともなく、柱にもたれ掛かってのん気に日向ぼっこをする宅配物。こんな平和でのどかな場所に来ると、宅配物にさえ共感してしまうのであった。

考えてみると、これほどまで無垢が許される場所って他にないんじゃないか。僕たちはグローバルな社会で生きている。すこぶる便利だ。でもそれは、離れた人とモノ、離れた人と人が効率的に繋がってるだけにも思える。堅固なルールとセキュリティで安全を模り、近くに住む他者とは隔絶して暮らしている。僕たちは、隣人を愛せているとは言い難い。他方で、H村は効率化と国際化を追求した社会だからこそ造りえた、現代のエデンの園のようだ。最寄り駅から徒歩五〇分。市街地とあえて距離を取ったかのようなHの立地。ここでは毎日の衣食住に頭を悩ませる必要などなく、近くに娯楽設備や医療機関も集約され、ささやかな暮らしに困ることはない。そして、そんな村に集う住人たち。彼らの中には、他人や部外者なんて一人もいない。私生活に限らず学校生活も分かち合い、毎日を過ごしているからだ。人種や国籍も問わない。誰にとってもネイティブじゃないけど、誰にとってもアットホームなこの村。ここはまさに現代の理想郷、エデンの園なのだ。これからも、サタンに唆されることなくみんなの平和が続けばいいな。

「まる」でイータ村に近づく

大西 美月



イータ村を歩いた。新しく、異様なまでも綺麗な建物が気づいたらもう建っていた。見慣れた景色の中にある、見慣れない建造物。新しいものを見ると私はワクワク感の裏側にいつも、異物感のような感覚を抱いてしまう。今までなかったものがある、見た目の綺麗さと近未来的なデザインも相まって宇宙人がやってきたのかと思ってしまう。見慣れないもの、というのは近づき難い。どうやって私は自分の中にこのイータ村を受け入れていくのだろうか。そう思いながら、初めてイータ村に足を踏み入れた。

建物の中に入ると私の期待を裏切ることなく、いわゆる「新品の匂い」が押し寄せてきた。綺麗なものは嫌いではない。だが不思議と自分との距離というか壁というか何か障壁を感じてしまうのだ。白と無機質なコンクリート壁を基調に、非常にスタイリッシュなデザインが施されている。なんともＳＦＣらしい。ＳＦＣ中高の「南校舎」と呼ばれる校舎が新しくできた時のことを思い出した。

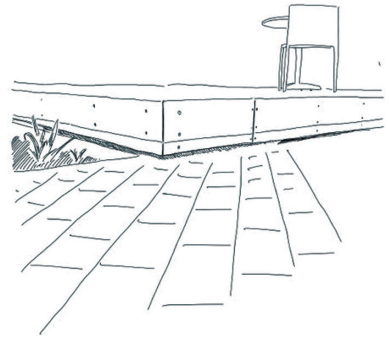
もし自分がここに住むとなったら、どんな生活をするのだろう、と頭の片隅で想像をしながら、建物を外から覗いたり、ソルトの中に入ったり、イータ村全体を外側から眺めたり色々な角度から眺めてみた。やはり「新しさ」がどうも自分の生活と馴染まない。

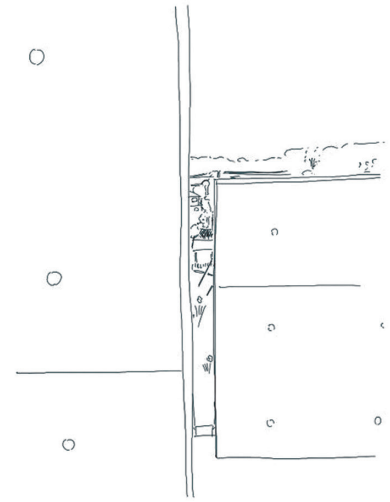
突如、花壇の中に隠れるように潜むマンホールが目に飛び込んできた。当たり前だが、ここにも生活に必要なインフラが整えられており、生活を営む学生たちがたくさんいるんだ、と感じた。新しさ、綺麗さとスタイリッシュなデザインによって見えづらくなっていたのは「生活感」だった。「生活感」が容易に目に映らないことが私自身とイータ村との間に距離を生み出していたのだと思う。

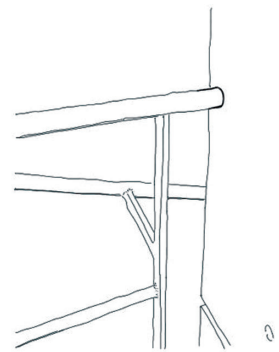
マンホールをきっかけに私の日常の中にもある「まる」を採集することにした。火災報知器、郵便受けのダイヤル、イスのキャスター。普段から目にしている角度でみたときにまるいものはもちろん、視点を変えてみると実は「まる」という側面を持ち合わせていたのか、と初めて気づくものもあった。「まる」が私とイータ村との距離を縮めてくれた。わずか一時間程度の散策で、イータ村に抱いていた「異物感」はもうなくなったように思う。

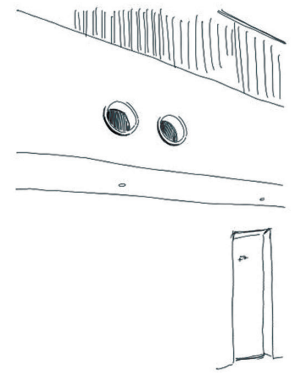
間

野上 桃子









恥ずかしながら、Hヴィレッジという単語を聞いたのは、このプロジェクトの説明を受けた時が初めてだった。初めて歩くHヴィレッジの空間は、真新しく綺麗で、キャンパスと似た無機質な灰色の建物と、まだ育ちきっていない自然との調和がまだぎこちないのが、なんだか愛おしかった。

ただ、問題はどこに行っても自然と建物のコンクリートが視界の大半を占め、目を惹くと感じるものに出会えなかった。普段から街中など、目を引くものは積極的に写真に収めるようにしているが、いわゆる目を惹くものが一見ないように思えた。だから、少し気になるものを撮り溜めていった。

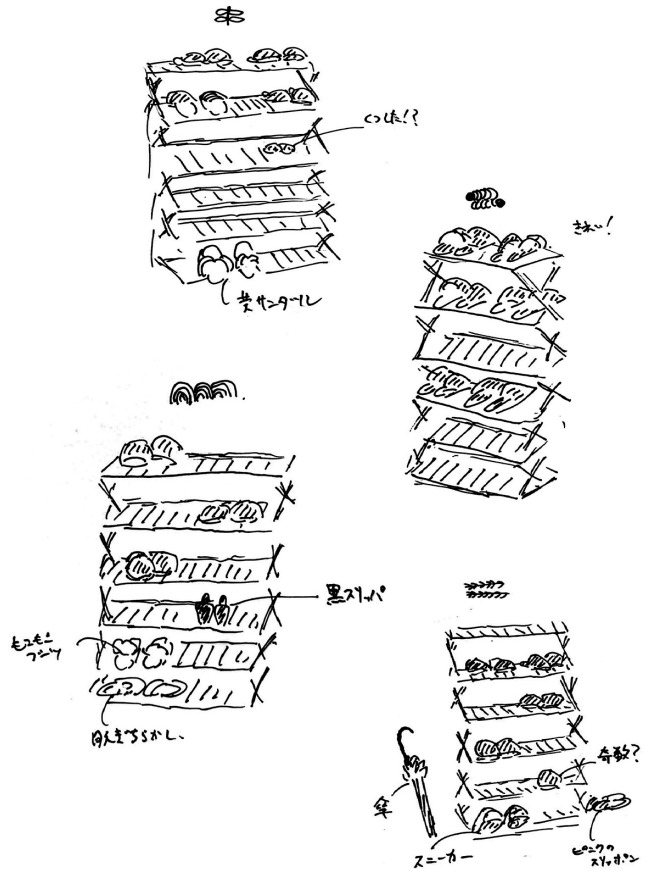
私にとって、少し気になるものは「間」。あいだ、ま。コミュニケーションをする際や演奏をする際に大切にしているものだ。Hヴィレッジにも間はたくさん存在していて、すべて何らかの意味を持っているように思う。例えば、地面と建物との間。なんらかの効率的な意味がありそうである。一方、ありんこたちのコミュニケーションの場にもなっていそうだ。手すりと建物との間は、たとえ手すりがさまざまな圧に耐えきれず、ぐにゃりと曲がったとしても建物には影響させまいという気遣いを感じる。自転車置き場の敷居と敷居の間は、自転車置き場特有のじめっとした空気を綺麗な空気と循環させるためのアイディアのようだ。天井の間は、間違いなく換気扇か冷暖房器具だろうが、建物の中に仕舞われているデザインが、この建物のプライドの高さを想像させる。

Hヴィレッジのような大きな建物は、そこにあるものとして認識していたので、気になるものを見つけようとしたことがなかった。いざ気になるものを探そうとすると、小さい頃に思わずじっと見つめていたようなものと似たものが目に留まることに気がつき、それと同時に建物がある性格を持った、ひとに似た何かに見えてくる。

Hヴィレッジに存在する様々な「間」は、一つ一つはさりげないが、どことなく優しいコミュニケーションを想像することができる。Hヴィレッジの「間」は、これからの学生同士のコミュニケーションがより活発になっていくであろう空間そのものを表しているのかもしれない。

“あること”と、“いること”

宮下 理来



Hヴィレッジの棟内はまだできたての香りが漂っていた。それは煮込まれたスパイスの香りではなくて、調理前、という感じ。綺麗さと白さに慣れないのは私たちと入居者だけではなくて、建物だって同じだ。四月、今は生活に種を蒔く季節。一見無機質に見える、生活が染みつく前のこの「村」の中でも、確実に生まれているはずのささやかな関係性の芽吹きを探したくなった。

歩いているうちに目についたのは、スリッパ置き場だ。住居用の四棟それぞれの入り口に、木で作られたスリッパ置き場がある。全て同じ形で、六段。中には入れなかったので、想像してみる。奥には鍵と番号付きの下駄箱が見えた。下駄箱に普段使いの靴を入れて、ここに一階の共用フロア用のサンダルやスリッパなどを置くのだろう。実際、同型の据え置きのスリッパが十足程度置かれていた。

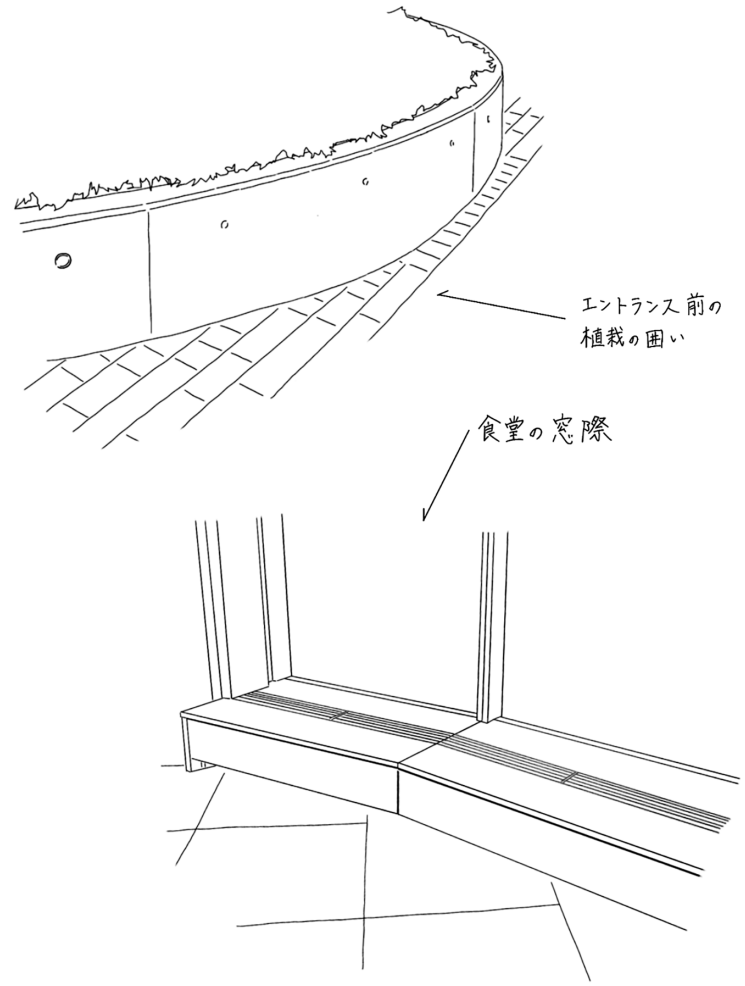
私がシェアハウスをしている。そこで実感したのは、帰ってきて誰かの靴があることの心づよさだ。帰宅すると、自分のものではない靴がある。おかえりは言ってくれなくても、確かにそこに、いるとわかる。それだけで、自分が繋がっている関係性を確かめられる。

一方で、スリッパ置き場は靴がない方がフロアに誰がいることになる。夜、ヴィレッジへと帰り、スリッパが減っていれば、おそらく共用スペースで話に花が咲いているのだと予想できる。胸がときめけば自分もスリッパへと履き替え、輪に加われば良い。もし疲れていて一人になりたい日なら、そのまま誰かしらの気配を感じながら部屋へと向かえばよい。とにかく、他人との繋がりを、人と会わずとも感じられることは、毎日のささやかな支えになる。そして、下駄箱が厳重なぶん、代わりにスリッパ置き場がその役割を担っている。無言の「おかえり」を囁くように。

バジル棟では、自分の私物のスリッパが散見された。我が家だとしても、他人の目はある。足元はおしゃれでいたいのだろうか。だとしたら、これから増えていくのだろうか。また、私物のスリッパと所有主が結びつくようになれば、在不在がさらにわかりやすくなる。あの子、やけに雑に置いているな、とかも感じ取れるようにもなるけれど。あと、やがて棟ごとに置き方の綺麗さに差が出はじめたら、性格も似てきたり。それはもうハリーポッターみたいだ。

座れそうな場所

山本 凜



イータビレッジの中で、椅子のように座ることを目的としてデザインされたわけではない、けれど座れそうな場所を集めた。ひとつはエントランスの前にある円形の植木の囲い、ひとつは食堂の窓際にある空調設備らしき直方体である。室外と室内ではあるが、どちらも陽の差す場所にあり、座るのにちょうど良さそうな高さであるために良い「座れそうな場所」だと思いスケッチをした。

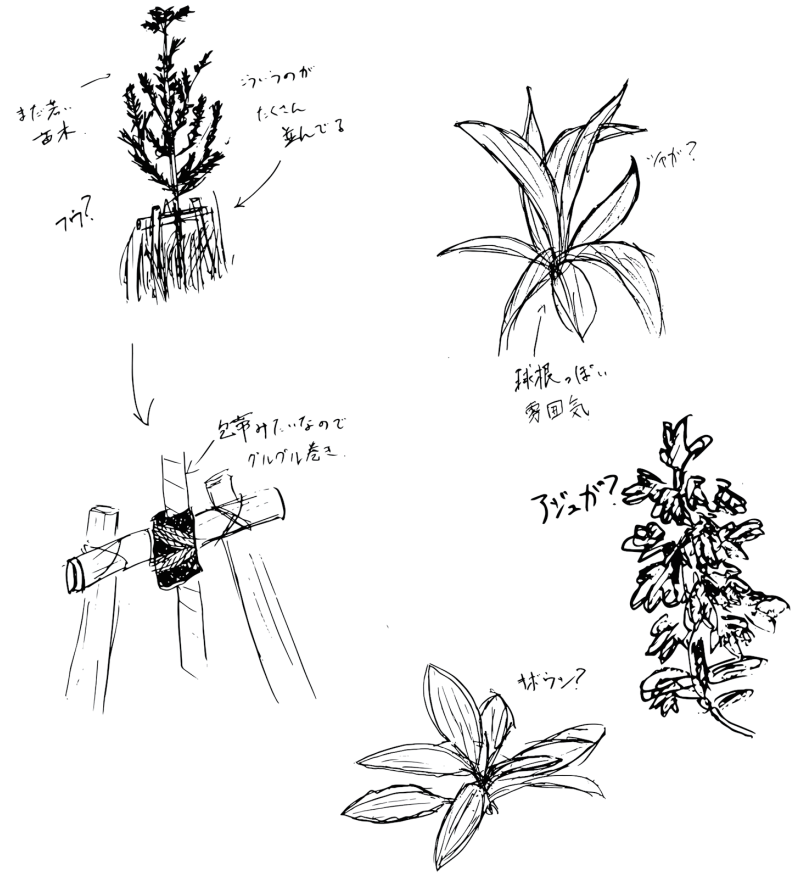
イータビレッジは、そこに訪れる人々が語らえるようなスツールやベンチがところどころに設置されている。それは良いことだけれど、地面に固定された位置関係の頑なさは、時に窮屈かもしれない。向かい合って顔を見合わせるのは少し気恥ずかしいが、隣に座って同じ方向を見ながら声だけを聴いて話したら、もっと気楽に言葉を交わせるかもしれない。腰を据えてしっかり話し合おうとする雰囲気よりも、「ちょっとそこに腰掛けて話そうか」くらいの雰囲気でしか生まれない話題もあるだろう。デザインされていない自由さが私たちの距離をぐっと近づける瞬間を、誰もがきっと経験したことがあるはずだ。

また、「座れそうな場所」は、私たち自身がその空間に対してどのように反応しているのかを知る手掛かりでもある。例えば、エントランスの植栽の囲いは円形になっていて、メビウスロードに向かって開かれた方向に座ることも、木々の生い茂った左右の方向に向かって座ることも、玄関に向かい合う方向に座ることもできる。食堂には座れそうな高さの空調が窓に沿ってぐるりと設置されているので、椅子やテーブルの近くに座ることもできれば、階段の影になるような奥まった場所に座ることもできる。座る位置や方向がデザインによって明らかに示されている椅子やベンチと異なり、「座れそうな場所」では、そこに座ろうとする各々が場所のアフォーダンスを受け取って自らの居かたを選択する。私たちが無意識の中で選んだ居かたには、私たちの空間に対する嗜好が反映されているはずだ。

「座れそうな場所」がたくさんある空間は豊かな場所なのではないかと思う。そこでは、設計によって制限されることのない、他者との関わりかたや自らの居かたに対する可能性が開かれていて、私たちは意識的・無意識的にその中で自分にとって好ましい振る舞いをする。その振る舞いを振り返ってみれば、きっと興味深い発見がある。

完成していく

白井 朔太郎



新しい建物、或いは「村」をデザインしていく上で、欠いては成り立たないのが、それらを取り囲む植物たちであるように思う。

正直なところ、これを人工物と呼ぶかどうかは議論があるかと思う。しかしながら、この植物たちには、誰かしらの「こうあって欲しい」という意図が込められており、その意図を具現化するある種の「デザイン」である、と考えることもできるだろう。

昨今、マンションを建てようとすれば、規模の大小はあれど、周辺に植物を植えるのが定石である。

村について考えてみても、村の周りには取り囲むような「里山」があり、村人の手によって管理され、村にとって利する形で運用されている。

新たに出来上がっていくHヴィレッジは、どのような植物とともに成り立っていくのだろう。

というわけで、僕は植えられている植物たちに目を向けてみることにした。

まず、よく見てみると気づくことがある。なんだかとても種類が多い。大抵、建物の周りの植物なんて、一種類か二種類くらいしかないのが相場である。短く刈り込まれた、直方体に整えられた低木。そういうのは見飽きるほど見ている。しかし、Hヴィレッジの周りには、それだけじゃない、たくさんの植物が植わっている。ざっと確認しただけで十種類くらいはあるのではないだろうか、と思う。なんとなく、出自も境遇も違う、多様な学生が集まる、Hヴィレッジのあり方に近いものを感じる。

建物や村を取り囲む植物をデザインする上で、面白いのは「全て完成するのが何年も後」である、という点であると思う。その意味においては、今Hヴィレッジに植えられている木は、まだまだ未完成の状態である。たくさんの、添木に支えられた若い苗木たちが規則正しく並べられている様は、おそらく今しか見られない光景だろう。

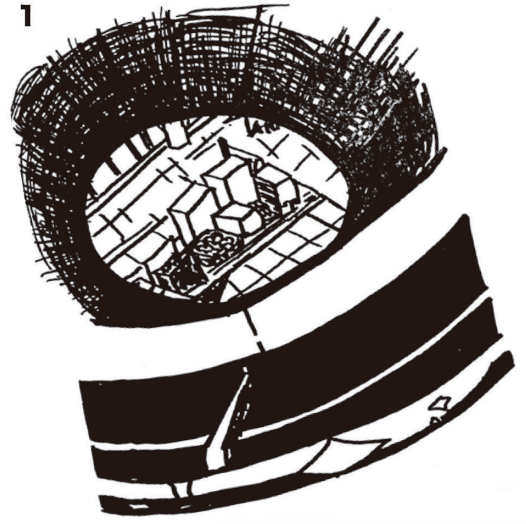
今見える植物たちから、十年後を想像する。きっと木はもっと大きくなって、森のようになっているはずだ。様々な種類が植えられている花たちは、お花畑のような美しさになり、学生たちにとって、新たな憩いの場となっているかもしれない。

そこにある植物たちは、少しずつ形を変えながら、少しずつデザインされ、Hヴィレッジを形作る大切な要素であり続けると私は思う。

上からHヴィレッジ

芝辻 匠

1



2

生ぬるい春の風が吹くHヴィレッジを、ふらふら歩く。分譲マンションのチラシにも劣らない寮の風景を見ていると、私が通うこの大学がとても良いところのように錯覚する。どこからか、「おおい」という声がする。響きを辿って目をやると、自分の上に人がいて、こちらに向かって手を振っていた。普段私たちは、水平な地面の上で生活し、友人らと取るに足らない話を繰り返している。だから、人に見下ろされて「おおい」などと言われると、なんだか居心地が悪く感じてしまう。

心地悪さの要因は、第一に、首に感じる痛みであろうが、痛みと同時に、私たちは、見上げて話すことに不慣れだということに気づく。私たちはよく、「上から目線」という言葉を扱う。それは、物理的な位置を示した、上から、ということではなく、精神的な位置の上下を感じさせる話しぶりをすることを表しているだろう。実際に上からの目線で話されたときの気分は、と問われると、やはり喜ばしいものではない。では反対に、上から見下ろすのはどうだろう。自分の視点を垂直方向に少しだけ上げた位置関係によって、何が見えるのだろう。そうして私は、人を上から見られる場所を探したのである。

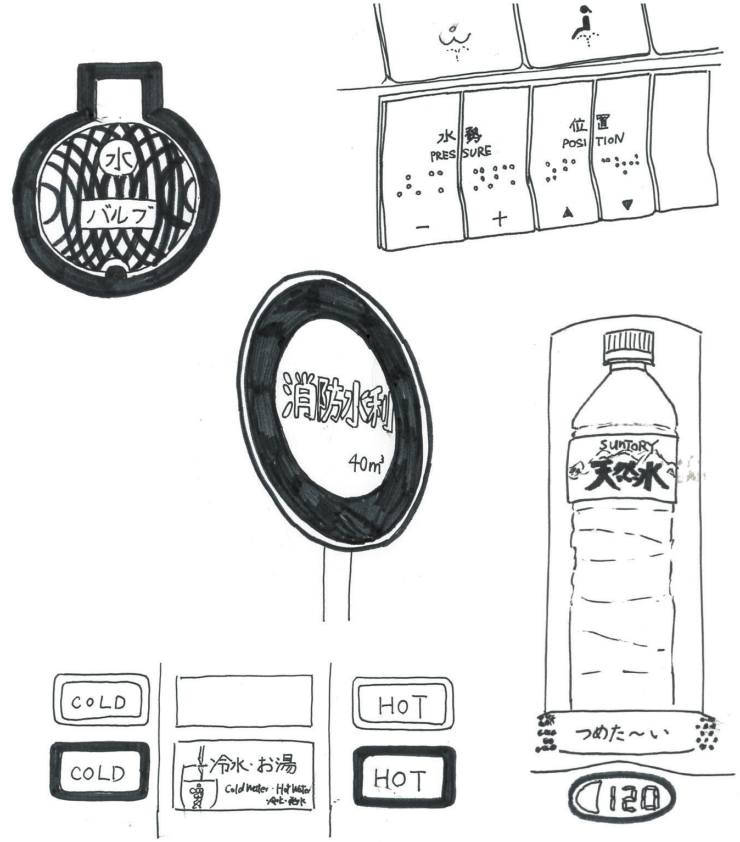
私が見つけた、「上からHヴィレッジ」は二つ。一つ目は、SALT館東側の二階と、一階の食堂をつなぐ吹き抜けである。ここからは、たった今、今日のカレーが終わったと告げられて仕方なくAランチを買う人や、奢りをかけた真剣なジャンケン大会、味噌汁マシーンへの当惑が見られる。やや唐突に現れた穴から食堂を見下ろすと、そこには学生の消費が映っていて、昼ごはんひとつ食べるのにも、それぞれの学生が忙しくしていた。

二つ目は、SALT館をくぐる通路の上にある。そこに立つと、人々が足下を流れてゆく。私の目の前には寮があり、それはつまり、それぞれの学生の生活がある。一方で、私の後ろには、いろいろな土地から学生が通うキャンパスがある。寮に住む学生にとって、内と外の境界はどこにひかれるのだろうと、私は勝手に心配になった。寮とキャンパスをつなぐ、まっすぐではない通路を上から見ると、私は人々の身体と精神の移動を思わずにはいられない。

キャンパスに住むことの良さは、むしろ、キャンパスから出ようとすることによってくっきりと際立つ。そう考えながら、私は今日もバスに混ざった。

みずみずしい暮らし

門澤 菫



「イータ村のユニット室は、水回りが全部共用らしいですよ」「え、水回りは絶対共有したくないんだけど。排水溝に人の髪の毛があるのとか絶対無理。嫌。」

風俗採集でイータ村を歩く途中、先輩とこんな会話をした。水は衛生環境と深く関わるものだから、水回りの清潔さにこだわるのは生き物として正しいのかもしれない。この会話の影響か、気づけば『水』という漢字を探しながら歩くことを決意していた。

まず、イータ村の南側にあるソルト棟の中を歩く。館内はどこも新築感が漂っていて、エントランスにある多目的トイレも非常に綺麗だった。やはり綺麗なトイレを見るとテンションが上がる。トイレは施設の清潔度合いを最もよく表す場所だ、と個人的には思う。ソルト棟の中には食堂もあり、食堂の入り口付近にはお茶と水のドリンクバーが設置されていた。食堂の真上、二階にはいくつかの椅子と自動販売機がある。自販機で売られているペットボトル入りの水を見ながら、自分は自販機で水を買ったことがないことに気がつく。一階降りれば無料で水を手に入れられるわけだが、それでもこの自販機で水を買う人がいるのだろう。ペットボトルに価値を見出しているのか、天然水とドリンクバーの水の味の違いがわかる人なのか。

そんなことを考えながら歩いていたら、いつの間にかイータ村の西側に来ていた。西側には消火・防火にまつわる表示がやたら多い。消防水利、バルブ、散水栓、雨水、防火用水槽。どの表示も日常生活で見たことはある気がするが、どこにあるかと言われたら思い出せないものばかりだ。それだけ街に馴染んでいて、私たちの生活を静かに守ってくれているということなのだろう。先ほど列挙した五つのうち、四種類はマンホールのように地面に設置された設備であったが、その多くには幾何学的な模様が描かれていた。特に円形が用いられているものが多いのは、波紋のイメージが影響しているのではないか、と推測している。水の絵を描くとなると雫型を想像しがちだが、わたしたちが日常生活で見る水の形はもっと多様なのだと気づく。

人間の体の六十パーセントは水だ、とよく言うが、水は人間の体外からも多様な面で生活を支えてくれていた。具材に水やスパイスを加えて鍋で煮込むとおいしいカレーが出来上がるように、『水』の字に囲まれたイータ村で、学生たちの生活がじっくりおいしく調理されていくことを密かに願った。

目次

H村に見られる「縮み」思考 2
「あちら」と「こちら」のあいだ 4
くぐって接する 6
ロゴマークとつながり 8
対話のかたち 10
続く意志をもった道 12
支えるもの 14
差し込む陽とできた影 16
○から九は何種類？ 18
もうひとつの現実 20
下書きと上書き 22
Hビレッジを流れる川 24
平和のおかげでアナーキー！ 26
「まる」でイータ村に近づく 28
間 30
〝あること〟と、〝いること〟 32
座れそうな場所 34
完成していく 36
上からHヴィレッジ 38
みずみずしい暮らし 40

イータ村風俗採集

2023年7月10日発行
文と画　木根景人・河井彩花・篠原彩乃・大森彩加・磯野恵美・坂根瑛梨子・小田文太郎・菱谷光
岩崎日向子・黄才殷・青山洸・渡邉鋼太郎・小泉大・大西美月・野上桃子・宮下理来・山本凜
白井朔太郎・芝辻匠・門澤董（掲載順）
編集・発行　慶應義塾大学 環境情報学部加藤文俊研究室　https://fklab.today/
〒252-0882　神奈川県藤沢市遠藤5322　デザイン棟B（ドコモハウス）